

2011.6.27 勉強会

担当:春名紗季江

劔岳遭難報告(まとめ)

25年前、ワングルが実際に遭遇した事例です。

- クライミング用語等

→ 沢研から報告書を読んでわかりにくかった部分などの補足をしてもらった。

- 遭難するということ…自分が。メンバーが。留守隊として。防ぐには。当事者となったら。

→ 1年の出席者全員と2,3年の一部に思ったことなど述べてもらった。

[1年]

中山:経験者でも起こりうる。油断はいけない。

渋谷:自由に行動していたことが影響。気の緩みは危ない。ランニングビレイ大切。

高橋:すんなりと通してしまうリー会の意義。なにができるのか。

戸嶋:なれたとしても基本が大切。装備の備えも重要。

角田:山と下界ではリスクの差が大きい。気の緩みは危ない。

中村(亮):油断はしない。注意するのが大事。相方がいたのに事故がおきてしまった。

金野:油断はいけない。クリップをしっかりつける。自己管理も大事。

[2年]

赤星:自身がC.L.の山行(燧ヶ岳)において下りでアイゼンを装着しないという判断ミスがあった。装備の不備や管理についてこれを機に改めて考え、万全にしていきたい。

[3年]

飯田:はじめてこの報告を聞くとショックで印象に残ると思うが、最近の活動でも、ランニングビレイを取り忘れるといったミスもある。ちゃんと指摘しあえるかと事前の確認が必要。ミスはするものという認識を持ち、相手が先輩であっても言うべきことは言う。

若林:危機管理が大事。技レをすることだけが対策ではなく、細引きなど自分たちが持つ装備を出し惜しみせず活用することも大事。

福島(主将):危険箇所の前後も注意。通過中は気が張って当然だがその前後緩みやすい。また、慣れてくるところが一番危ない。とくに上級生、効率化を図るようになるが手を抜きすぎない。最後に、小さなミスを見逃さない。死亡事故とまでいなくても、これまでも多数事故はおきている。反省会で上げるようなことでも蔑ろにしない。なるべく防げる危険は避けていく。

※現在の遭難対策システム→遭難対策マニュアル参照

- 当時の方から

→ 遭難発生時、現役メンバーだった本多さん、石田先生のことを紹介。

- おわりに…(個人的意見として)

こうして毎年、この事例を取り上げ1年生に話してもらったりするのは、全員が共通意識をもつためだと考えています。それぞれメンバーによってサークルや勉強などウエイトを置く部分は異なるかもしれませんが、ワンゲルに所属し一緒に山に行き活動するわけですから、ともに活動する仲間が遭難や危機管理といったことに限らず、どんな考えを持っているか知ることは、集団活動には必要ではないかと思います。まったく同じ考えをもつ必要はもちろんないけれど、潜在的に危険な側面を持つ登山をするわけですから、なにかあったとき協力して対処していく必要があるわけですし、よく知らないなにするかわからない人と一緒に行動するよりは、危険に対してある程度同じ認識を持っておいたほうがよいのではないのでしょうか。

事故は、自然環境的危険と、人的危険と、活動自体の危険が重なり合ったところに起きるといわれています。登山は自己責任が原則です。防ぐことのできる危険をなるべく防いで、楽しく安全な活動ができればと思います。

* * *

良くも悪くもワンゲルは今も昔も自由なようです。その自由さがワンゲルらしさだと思います。でも、クラブに所属しているからには、みんなで山に行くからには、大切にしなければならないことや守らなければならないこともあるはずです。

山で死ぬなんて言語道断。

誰かも言っていましたが、山にゴミと命は捨ててはいけません。捨てないでください。

こうして毎年遭難事例の報告会をする意味をそれぞれ考えてくれたらと思います。

楽しい夏山にしましょう♪